現代カスティーリャ語と規範

江　澤　照　美

El castellano actual y su norma

EZAWA Terumi

1．記述文法と規範文法

1999年にスペイン王立言語アカデミアは全三巻からなる『スペイン語記述文法』を刊行した。スペイン語の記述文法としてこれほど規模の大きな著作物は初めてのものである。従来の文法書は記述文法の対極にあるものとされる規範文法の性格を持つものであり、Bosque, Demonte 両氏の監修下多数の研究者が分担執筆した記述文法の集大成が出版されたことは、スペイン語の文法書出版の歴史にとっても大きな意味を持つ。また、研究者にとっても、規範文法で取り上げられたある問題をこの記述文法の観点から見直すことは、当該の問題の本質を見極めるのに役立つことになる。

例えば、スペイン語の規範を扱う語学分野の刊行物の中で近年取り上げられることが多い dequeísmo や queísmo の問題を引き合いに出してみると、これらは文法的に不適切な用法とされているため、現代スペイン語の規範を主題とする書物の中で言及される場合は、規範に外れた用法であるということが最初に強調される。一方、『スペイン語記述文法』では第34章で Gómez　Torrego がこの二つの用法について記述を担当している[1]。Gómez Torrego は現代スペイン語の語法や規範に詳しい研究者であるが、『スペイン語記述文法』の担当章においては自身が集めたデータや過去の研究成果を比較対照しつつ、これらの用法が生じやすい統語的・語彙的条件について具体的に記述している。Dequeísmo や Queísmo の構文使用者はそれが非文法的であるという認識を持っていないことを考慮し、

Gómez Torregoは同書では規範の問題に深く立ち入らず、各々の用法の拡がりについて規範文法とは異なる側面を読者に示している。

また、研究者等にはともかく、言語に関心を持つ一般の人々には気軽に入手しにくいものである記述文法的な性格の書物が、けっして廉価とは言えないが一応文法書の体裁をとって出版されたことは、一般の人々が文法に対して持つイメージを多少は変えるぐらいの貢献をしたとは言えないだろうか。それまで一般人向けのスペイン語文法を主題とした書物の多くは読者に「文法イコール守るべき規範」と思わせるものであっただろう。

近年のスペインの言語に関する状況変化は、たまに現地に赴くぐらいの筆者のような余所者にさえ何かしら気づくところがあるほど顕著なものとなっている。そして、その状況変化は特に最近の20年数年ほどの間に起こった国内の政治的かつ社会的な変化とも無関係であるはずはなく、むしろそのような国内の劇的な動きが言語をめぐる状況変化にも大いに関与したと思われる。

大勢の研究者の共同作業による記述文法出版もこのような時代の流れで実現した。言語はかくあるべしという規範に従うだけではなく、人々は言語の多様性に目を向け始めているのである。しかし、それは言語の規範が相対的に以前より顧みられなくなったということを必ずしも意味していない。今なお変貌を続けている社会で生み出される様々な事象が言語に与えている影響ははかりしれないものがあり、スペインもこの点では他国と同様で、これまでに存在しなかった新語が国外から流入してきたり、国内で生まれたりしている。時には言語的カオスと思えるような状態が生じている世界さえ見られる現在、人々は以前よりも言語問題に関心を示し、時勢に沿った新たな規範を求めているようである。

本稿の主題となるのは、スペイン全国の公用語であるスペイン語(カスティーリャ語)の規範である。この言語が生まれた時代からの規範に対する人々の考え方をふり返り、現在人々が求める文法的な規範の姿を浮き彫りにする。

ことばの規範は人間が定めるものであるが、規範の問題について人間は二つの異なる立場に立ちうることをまず認識しなければならない。それはつまり、規範を定める側の人々と、日常的に文章を読み書きし、話す人々——示された規範について何らかの意見や感想を持ち、その言語生活の中で規範に対する自分の態度を決める人々——のどちらかの側にいるという

ことである[2]。

本稿では規範を定める側の人々の状況やその規範の示し方を考察の中心に据え、一般の人々の規範に対する態度の表明の結果としてあらわれる言語の多様性についての考察という今後の研究につなげていきたい。

なお、ここまで述べてきたスペイン語とは周知のようにスペインの標準語であるカスティーリャ語のことを指す。この言語は元来イベリア半島の一地方の言語であり、現在スペイン全国の公用語として憲法で定められている。そして、このカスティーリャ語には特に近年国内の二言語併用地域でカスティーリャ語と同等に公用語としての地位を保証された各地方語から流入してくる語彙もある。

本稿では、カスティーリャ語の周辺の言語(スペイン国外・国内を問わず)から流入する語彙についても言及するため、本稿のタイトル及び本章以後の章において「スペイン語」と同義で「カスティーリャ語」という用語を使用する。

2. カスティーリャ語の規範——その変遷

2.1. 規範が確立されるまで

本稿で述べる規範とは一般的にその言語の使用者が則るべき模範的な規則である。これが文法書としてまとめられると規範文法となる。カスティーリャ語で書かれた初めての文法書と言われる Nebrija の *Gramática de la lengua castellana* はこの観点から考えればカスティーリャ語の規範を最初に示した書物と呼ぶに値する。しかし、言語規範がそれ以前に明確な形をとって存在しなかった時代に編まれた文法書が、その中で提唱した規則を文法規範として人々に遵守させるためにはいわゆる権威筋のお墨付きが必要であった。Quilis (1984 : 67-68) は Nebrija の文法書の解説においてこの文法規範の問題に触れ、過去の博識者や学者の意見が引き合いに出されたと述べている。

Frago Gracia (2002) は、近世に入るまでの時代に規範的なレベルでのカスティーリャ語の統一化の動きは特になかったと見ている。つまり、規範を示した Nebrija の文法書でさえ、本当の意味での規範文法とはなり得ていなかったということである。当時もまだ個人の文体の好みや教養の差によって生じる表記や形態の違いが見られた上に、Nebrija と Valdés のよ

うな共に学識者とされる人々の間でも表記等に関して多くの見解の不一致があったと Frago Gracia は指摘している[3]。日常的に読み書きをする人間が現代ほど多くない時代に模範とされるのは宮廷人や知識人のことば遣いであり、文法書もこのような人々に必要とされていた。つまり一般国民が範とする書物にはまだほど遠い存在であった。

Nebrija の文法書以外にも Valdés の *Diálogo de la lengua* をはじめとしてカスティーリャ語の望ましい表記や形態について著された書物が出版されているが、Frago Gracia (2002) がおこなった、中世から黄金世紀に至るまでのテキストのカスティーリャ語の分析結果を見渡してみると、時の経過と共にカスティーリャ語が現在ある姿に近づいていく様が読み取れる一方で、著者による表現の個人差等はまだ根強く残っていて、言語に関する最高権威機関である王立言語アカデミア設立前の時代には、文法の規範はそれ自体がまだ確立の途上段階にあったことがわかる。

2.2. 王立言語アカデミアと規範

1713 年に設立されたスペイン王立言語アカデミアは以後、文法書や辞書、正書法に関する書物を出版し、現在に至るまで言語に関するスペインの最高権威機関として位置づけられている。カスティーリャ語の正書法については、Nebrija もその文法書の中で新しい規準を提唱しているが[4]、本格的にその規範を示したのは言語アカデミアであるとのちに評価されている。

しかし、言語アカデミア自身もカスティーリャ語全般について常に明確な規範を示し続けてきたわけではない。例えば、時制や法の定義は古くから多くの文法家を悩ませる厄介な問題であった。西川 (1988) の時制研究史を辿ると、Nebrija の文法書以後に世に出た諸家の文法書でも時制の分類を巡って見解の相違が見られるが、言語アカデミアが著した歴代の文法書においてさえその時制論が現在の分類に至るまで幾度も修正を重ねたものであることがわかる。

カスティーリャ語史の中で言語アカデミアや文法家たちが提唱した表記や文法の分類等の変遷を振り返ると、わずかひとつの言語の規範確立と言えどもそれが想像以上に困難な試みであることに気づかされる。規範として提唱されたものに皆が従ってくれなければそれは規範とは呼べない。規範を提唱する側の人々には何らかの政治力・影響力が備わっていることが

必須であった。また、一度提唱した規範の妥当性はその後も常に問われ続ける。言語の規範が現実世界での使用実態とはあまりに遊離していると人々はそれに従うことを望まず、表現が多様化する傾向が生じる。また、言語が時代を反映する鏡のようなものであり、また、時の流れと共に変化していく運命を持つ以上、規範の提唱者はいつの日か古くなった規範の見直しをする必要に迫られることになる。このように規範を提唱する側に立つ人々は世の中の動きを熟知し、ことばの流行り廃りに絶えず注意を払う必要がある。

しかし、ことばの移り変わりが認知されてもそれが必ずしも迅速な規範の見直しの動きに直結するとは限らない。新語の中には定着しないままにやがて姿を消すものが多いし、既存の表現と比較した場合に新語の使用を選択するほうが常に望ましいとみなされるわけではない。いや、むしろ新語の使用は躊躇されるほうが一般的であろう。

また、言語アカデミアのように立場上どの機関よりも言語の規範を追求せざるをえない機関は、辞書等自らの出版物の改訂に際し新語の採用には一般の人々よりもはるかに慎重な態度をとることになる。言語アカデミアが示す規範は研究者やマスコミの主張するものよりも保守的であるということが一般的に言われてきたが、立場上それはやむを得ぬことであろう。

1973年に言語アカデミアが出版した文法書 *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española* は、その "Esbozo" という控えめなタイトル表記や、POR SU CARÁCTER, PUES, DE SIMPLE PROYECTO, EL PRESENTE *Esbozo* CARECE DE TODA VALIDEZ NORMATIVA. という前書きの一文が注目された[5]。これらの表現に垣間見える姿勢は伝統ある言語アカデミアのものとしては大きな変化を示しているが、それでも安易に新語をその辞書の改訂版に採用しないアカデミアというイメージは一般的にまだ残っているようである。そう思わせる一つの例としては、Gómez Torrego (1995) の第二部にまとめられた、近年のアカデミアの辞書に加えられた新語と廃止された語・採用が予想されながら見送られた語についての詳細な解説に見られる[6]。言語アカデミアによる新語の採用はとかく世間の注目を浴び、新聞記事にも取り上げられるほどの出来事である。

しかし、この十年くらいの間にインターネットがスペイン全国で瞬く間に普及してきた中で、言語アカデミアは独自のウエブページを開設したり、

中南米等のスペイン語圏の言語アカデミア[7] とも連携して国際スペイン語会議を開催したりするなど、少し前までの保守的なイメージとは比較にならぬほど積極的に対外活動をおこない世界に向けて情報発信をしているのは周知のことである。

特に中南米諸国との言語面での連帯を強めようとする動きは近年のアカデミアの活動の中でも顕著なものとなっている。2001年に改訂版が出版されたアカデミアの辞書にも旧版の3倍の数のamericanismoが採用されていることが新聞に取り上げられた[8]。今後言語アカデミアが出版を計画している辞書類においてもこれらの中南米を中心とした他の言語アカデミアが参加する予定であるが、これからスペイン語圏の言語アカデミアが一致協力することでなしうる事業が従来よりはるかに大規模で内容の充実したものになることは想像に難くない。しかし、これは同時に、スペイン言語アカデミアがスペイン語圏全体を巻き込んで言語規範を確立しようという試みでもあるかのようだ。

以上のように、スペイン言語アカデミアは、近年になって言語の多様性を認め始めた。権威という存在に対する敬意が薄れつつある現代社会において、カスティーリャ語の世界でも進行する一方の言語の多様化をまず事実として認めなければ、そのあとに目指すべき言語の共通性追求が容易ではなくなっていることに気づいたのかもしれない。

しかし、結局のところ、自らを中心に据えることを前提として言語の規範を追求するという言語アカデミアの姿勢は以前の姿勢とそれほど変わらぬようにも思える。外国向けには言語の多様性を認め、スペイン語圏の他国の言語アカデミアにアプローチしているが、そうした積極的な歩み寄りの姿勢もスペイン国内の地方語やそのアカデミアに対してはあまり目立つ形では示されない。カスティーリャ語至上主義を嫌いナショナリズムを標榜する一方の地方語アカデミアとの連帯は現在の国内情勢を見る限りそう簡単に実現する気配を見せていない。

2.3. マスコミや言語の専門家たちから見た規範

スペイン社会は、独裁者フランコの没後――特に1980年代以降――の社会主義政権誕生とそれに続く保守政権への政権交代という極端な変化を経験した。スペインのマスコミは、そんな中にあって20世紀終わり頃になってようやく先進国らしい様相を示してきた。民放のテレビ局が誕生し、衛

星放送の普及により国外の番組も選択の余地が十分あるほど視聴できるようになった。また、二言語併用地域におけるその地域固有の言語での表現の自由が保障され、固有の言語版の新聞発行や書籍出版活動が活性化し、地方語での放送も開始された。フランコ独裁時代の抑圧の反動とも言えるこの急激な政治的・社会的変革の中で、カスティーリャ語はとりわけ1980年代以降現在に至るまでマスコミの進歩と共にその影響を様々な面で強く受けることになる。

そして、この激動の時代の中で新たに生まれたり国外から流入してきたことばが増大すると、世の中の最先端の動きを常に追わねばならぬ使命を負ったマスコミにとって、言語アカデミアの辞書の新語採用基準とは関係なく、現実社会で使用されている言語の使用実態の把握は急務となった。それに加えて、1990年代からこれも相当な勢いで本格化したインターネットの世界的な普及により、電子メールやウエブサイトによる情報交換・収集が可能になり、これがカスティーリャ語のみならず世界中の言語に多方面から少なからぬ影響を与えたことは周知の事実である。

こうして、言語アカデミア以外にも、言語の規範を定める必要性を感じたマスコミが社内のジャーナリストを執筆陣として、時には言語の専門家の協力を得て、各社独自の表現規準を定めつつ、それを出版という形で社外に出し始めたが、この種の本の出版活動ははからずもそのマスコミのことばに対する取り組みをも広く世に表明することになった。

このマスコミ各社や言語の専門家等によるカスティーリャ語の規範的な性格の書物の出版が特に1990年代以降活発化し、それぞれが版を重ねるに至る。その分野の書物の多くは現代のスペインにおいて、言語アカデミアが示す規範やその判断基準の変化に絶えず注目しつつ、ある時はアカデミアの提唱に沿った主張をし、またある時は独自の見解を披露している。以下、まずマスコミや言語の専門家等が出版している書物の全体的な傾向について簡潔な要約をおこない、各々の書物の狙いを更に詳しく追求してみる。

まず、マスコミによる規範的書物の出版事情であるが、通常、新聞社や放送局は記事執筆や放送の際に報道者による表現の相違が生じることのないよう、各社が独自のガイドラインを定めている。それがlibro de estiloまたはmanual de estilo（以後、両者を「スタイルブック」と総称する）として広く出版されている。スペインの言語事情のドラスティックな変化

はマスコミが伝え、また時々短期間であるが現地に滞在した筆者自身も実感しているところであるが、その変化がマスコミ各社のスタイルブックの内容にに何らかの形で反映されているであろうと予想されたので、複数のスタイルブックを収集して各々の内容を調べてみた。その対象としたのはABC (1993), 同 (2001), Agencia EFE (1992), 同 (1998), EL MUNDO (1996), EL PAÍS (1996), 同 (2002)[9] である。以下各書の特徴について簡潔に述べることにする。

上記のスタイルブックの中には1970年代から版を重ねているものがあり、EL PAÍS (1996) はそのひとつである。初版が1973年で筆者が手に入れたのは1996年11月発行の第13版で、同書の第2版は1980年3月に、そして第3版は1990年4月に出版されている。この年に第7版まで出て、以後1991, 1993, 1994, 1996年と新しい版が出ている。他に比較すべき資料を持たないため、初版から13版までの間に内容にどれほどの改訂が施されたのか定かではないが、第3版以降の出版ペースに着目すると、1990年代に入ってこのスタイルブックがそれなりに世間に注目される出版物となってきたと考えられる。

EL PAÍS社は2002年に第17版となる新しい版を出版したが、編集長のJesús Ceberioは同書のプロローグの中で、スタイルブックの辞書の部分に大きな改変を加えたことを明らかにしている。それは情報科学分野の語彙で、カスティーリャ語への置き換えについての判断を指しているが[10]、このような具体的な改変の事実がプロローグの中で明かされるということは、1990年代後半にカスティーリャ語に流入してきた情報科学分野の語彙の多さを物語っている。

Agencia EFE (1998) もその初版は1976年に出版され、以降増補改訂を重ねてきた第11版である。間違いやすい文法項目や表現についての説明が全体の半分を占め、残りの半分は語彙集である。Agencia EFE (1992) はこのEFE通信社のマニュアルを補足する形で、使い方を間違いやすい品詞の使い分けや固有名詞の表記などについて紹介している。

EL PAÍS社やEFE通信社が1970年代からスタイルブックを出版しているのに対し、ABC社のスタイルブックの初版が出版されたのは1993年である[11]。2001年に第2版を出しているが、これは初版の項目を大幅に変更した改訂版である。そのプロローグによると語彙も入れ替えをしたようだが、それ以上に、文法や文体の問題について多くの変更をおこなったこ

とが記されている[12]。EL PAÍS 社のスタイルブックでは辞書が全体の半分を占めているが、ABC 社の場合は辞書が占めるページは少なめで、むしろ一般に人々が迷いを生じやすいアクセントや句読点の打ち方、文法規則等についてより多くのページが割り当てられていて、EL PAÍS 社のスタイルブックよりもやや規範色の強い書物となっている。

1989 年に創刊された全国紙 EL MUNDO もスタイルブックを 1996 年に出版している。他社のスタイルブックが、自社の編集方針は示しながらもその文法規則等については誰もが一般的に遵守すべき規範として示している傾向を持っているのに比べると、EL MUNDO 社はそのスタイルブックの中で、「EL MUNDO 紙は以下のようなやりかたをとる……」というふうに自社の名前を文中に出すことが多く、それぞれの項目が NORMAS という括りのもとに編集されていて、この書物が記事を書く際の EL MUNDO 社の指針であるという点を強調しているように見受けられる。EL MUNDO（1996）も全体の半分は語彙や地名、略語などの説明に費やされている。

今回筆者が主として参照したのは新聞社のように書きことばを表現媒体とするマスコミの出版物であるが、放送局のスタイルブックの場合には放送時のカスティーリャ語以外の言語の発音・表現に対する取り決めも加わってくる。

その他、本稿では内容に触れないが、地方語においてもカスティーリャ語と同様に、新聞創刊や放送開始などに従い、スタイルブックがそれぞれの言語版で出版されている[13]。

さて、次に言語の専門家が単独で著した規範的性格の書物を取り上げることにする。この場合の著者は主に言語学者やジャーナリスト等である。先述したようにこういう人々がマスコミのスタイルブックの執筆陣に名を連ねている場合も少なくない。

言語の専門家が著す書物には、マスコミが出版しているスタイルブックのように一般的に誤解されやすいことばや文法事項を整理したものもあれば、文章の正しい書き方や作文の技術について述べたものもある。また、その両方の側面を併せ持つ書物もある。さらに、今どきの言語のあり方をエッセイ形式で綴り、その中で規範について論じた著作もこの分類の中に含められるであろう。

本稿筆者はここ数年来スタイルブックや言語の専門家が規範について著

した書物を収集しているが、ここでそのすべてを紹介する余裕がないため、以下では言語の専門家が特に規範を主要テーマとして出版した著作物の一般的な傾向を述べ、ごく一部の書物を紹介するに留めておく(14)。

本稿の第1章にて言及したGómez Torregoは一般人向けの分かり易い規範書を何冊も出版しているが、例えばGómez Torrego (1993 a) (1993 b)では、間違えやすいアクセントの位置を示すことから始まって、句読点の打ち方、文法項目ごとの誤解しやすい点等を指摘している。規範的な書物という性格上、間違いは明確に間違いである旨が記されている。

学生を対象とした書としては、Romera Castillo *et al.* (1996) やSantos Guerra *et al.* (1997) などがある。文法的規範に関しては、一般人対象の書物との間に扱っている内容に顕著な違いは見い出せないが、レポート課題を出すことが要求される学生向けに適切な文章表現のためのこつや文体上の技法に関する詳細な記述も見られるのが特徴的である。

Martínez de Sousa (2000) はマスコミのスタイルブックと同じく、文法規範と用語集をセットにした600ページを超える大書である。

また、Grijelmo (1997) はジャーナリスト向けの文体指南書である。著者はEL PAÍS (2001) の出版にも関与し、特にジャーナリズムの言語の専門家として現在その活躍ぶりはめざましい。Grijelmo (1997) においても、文体の善し悪しや語彙選択について、EL PAÍS紙等実際に掲載された文章を例として引用しながら説得力のある論を展開している。また、近年Grijelmo (1998) (2000) のような言語エッセイも出版していて、それぞれ好評を博している。前者では各分野で目につき始めた新語・造語等を題材に最近のカスティーリャ語 (Grijelmo自身はespañolと表記) 事情を語り、後者においては人間の行動や社会に影響を及ぼしうる単語自体に内在する力の正体を分析する。いずれも近年のスペイン社会の出来事を例に引いているため、現代スペインの言語問題、特に社会と言語の関わりを知る上で参考になる作品である。

Lechuga Quijada (1996) も規範を逸脱した20世紀末のカスティーリャ語の現状についてその全体像を細かく観察分析している。軽いエッセイ形式の書物ではあるが、この分析には興味深い点があり、次章で再度取り上げることにする。マスコミのスタイルブックや言語規範に関する専門家の出版物についての近年の出版傾向とそれぞれの書物が取り上げている内容は概ね以上のようなものである。

3．規範が示しているもの

前章で、カスティーリャ語の歴史の中で、文法の規範を示した知識人や言語アカデミアのような存在がありながら、肝心の規範を示す側の人々の間に見解の相違があり、本当の意味での規範確立にはかなりの時の経過を要したことを述べた。そして、近年国内で起こった変化と国外から押し寄せてきた変化の両方の影響を受け、現在のスペインに生じた言語をめぐる動きに対して問題意識を持つ人々がおこなってきたこと――規範的な言語の在り方を国民に示すこと――の経過を、我々は彼らの出版物を通じて追ってきた。

近年多少の方針の変更は見受けられるものの、相変わらず伝統的な立場をとる言語アカデミア、言語の最前線を追っかけるマスコミ、言語アカデミア・マスコミの動向や一般の人々の言語感覚に注目し、その問題点を鋭く指摘する言語の専門家たちというふうに、それぞれ立場は違うものの、彼らが各自の見解をその中で述べている書物にほぼ共通しているのは、内容が啓蒙的であることと、表現の正誤についての判断の指針を明確に示していることであろう。そのため、これらの書物は外国語としてカスティーリャ語を学ぶ者にとっても役立つものとなっている。

内容としてとりあげている項目が多岐にわたっているため、各々の書物の内容について比較し論じるのは容易なことではないが、本章では、現代カスティーリャ語の規範をそれぞれ異なる立場から指摘している人々がほぼ共通して持っていると思われる、現代人の言語感覚に対する認識の実体を可能な限り明らかにしていきたい。もちろん、一般的な傾向の記述にすぎないので、以下に述べる中で、特定の書物の中で該当する箇所が存在しない場合もありうることを予めお断りしておく。

3.1. 規範的書物によって扱われる問題について

まず、著者から示される規範は大体以下の三種類に分類される。特にスタイルブックの場合は箇条書きで明確に示される傾向がある。

① 形態が類似している語や用法の区別
　例：porque/porqué/por que/porqué の区別

② 間違いなので使ってはいけない表現
　例：dequeísmo や queísmo の用法

③　間違いとは断言できないが使用を避けたり、他の表現に置き換えることが奨励される表現

例：anglicismo 他カスティーリャ語以外の言語起源の語彙使用

各分類の例はもちろん他にもあることは言うまでもない。

①に属する例としてはよく見られるのが cocer と coser の混同のような正書法上の問題である。間違いやすい単語の綴りを正しく書き分けられるかどうかは文を書く人間の受けた教育や勉強量に左右されるため、カスティーリャ語の母国語話者でさえ誤りを犯す可能性があるということは理解できる。しかし、上述した4種類の“porque”の場合も実際にきちんと区別して書けない母国語話者が存在するという話を筆者自身耳にしたことがある。規範的書物の説明を読めばこれらの区別は比較的理解しやすい事柄のように思えるが、音声や文法等で何かしら近似している点があると、母国語話者であっても混同してしまう可能性があるのだろう。

②の例として挙げた dequeísmo, queísmo はたいていの規範的書物で指摘されている用法である。それほど最近顕著に出現している用法と考えられるが、本稿冒頭で引用した Gómez Torrego (1999) の使用例の拡がりを見ていると、将来母国語話者の大多数がこの用法に違和感を感じなくなり、規範を示す書物においても、これが誤用とみなされなくなる時代がやって来るとしてもおかしくないだろう。代名詞の loísmo, laísmo も②の例として取り上げられることが多いが、スペインと中南米諸国の言語を通じた連帯が密になれば、これらの用法についての評価もいずれは変わる可能性があるかもしれない。

さて、①や②が文法や正書法等に関する問題として捉えられるのに対して、③は少し性格を異にするものである。語彙論・意味論・語用論等の分野に関わる問題が多く、該当する語の選択判断については社会言語学的な分析も多く見られる。Nebrija の文法から言語アカデミアの文法に至るまでに編纂された伝統的な規範文法においてはあまり重要視されておらず、近年になって様々な社会問題を反映して現在も変化し続けているこの③に関わる問題に内包されているものの実態を次節で検証する。

3.2. 文法以外の規範

3.1. で③の例としてカスティーリャ語以外の言語起源の語彙の使用を挙げたが、それ以外に③に属する問題とはどんなものがあるだろうか。この

問いについては、Lechuga Quijada（1996：95-108）が同書の各章で取り上げた現代カスティーリャ語の各タイプをLechuga Quijada（1996）が“castellanopatías”（気持ちだけカスティーリャ語表現［訳は本稿筆者による］）と命名している問題のある用法とその具体例、そしてそれに対応する正しい用例という一覧表の形で示したものが参考になる。同書に掲載されている例の一部をここに示すことにする。

［Castellanopatíaのタイプ］	［用例］		［正しい表現］
• error	carnecería	→	carnicería
• galleguismo	esperar por	→	esperar a
• anglicismo	out	→	pasado de moda
• galicismo	chef	→	jefe de cocina
• italianismo	viene indicado en	→	está indicado en
• neologismo	empalidecer	→	palidecer
• pedantismo	ser susceptible de	→	ser capaz de
• *pc*	gente de color	→	negro
• localismo	descambiar	→	cambiar（Andalucía）
• vulgarismo	ayer noche	→	anoche
• etimología popular	destornillarse	→	desternillarse
• muletilla	pues..., quiero decir（quicir）, o seaaa...	→	使わない
• palabra-ataúd	hacer casas	→	construir

（Lechuga Quijada（1996：95-108）より抜粋整理）[15]

最初のタイプerrorは別として、以下Lechuga Quijada（1996）が指摘しているタイプはすべて本稿の③に分類されると考えられるが、そのうちgalleguismoからitalianismoまではカスティーリャ語の世界に外部から流入してきた表現として総括できる。ただし、Lechuga Quijada（1996：75）がgalleguismoとして例に出しているのは、ガリシア語からの類推で生じるEstoy esperando por Juan. のような例であり、これは後述するlocalismoの下位分類とするほうが適切な例であると思われる。Lechuga Quijada(1996)では明示的に言及されていないが、anglicismo, galicismo, italianismo等と同類に扱うべきであるのは、スペインの地方語の語彙がカスティーリャ語化を受けずそのままの形態を保持してカスティーリャ語の

中で使用されるケースであろう。例としてはカタルーニャ語の fuet, ガリシア語の meiga, バスク語の txacolin 等。

続く neologismo は外部から流入する語もあれば、カスティーリャ語内部で生じる語もある。そして、pedantismo 以下 *pc* までは基本的にはカスティーリャ語内部で生じる語が中心となるが、後述するようにカスティーリャ語以外の言語の影響が皆無とは言い切れない用法もある。各々の発生過程は異なるので、pedantismo 以下の各タイプに解説を加えながらそれぞれの問題表現について考察を試みてみる。

まず、pedantismo であるが、教養語を装うために本来より簡潔に、もしくは明確に言えるものを婉曲的に表現する用法である。特別な語彙を使用するとは限らず、realizar を使うべきところで tener efecto を使うような場合も pedantismo と考えられている。より適切な語を複数持ちながらそれに代用される a nivel de や en base a 等は多くのスタイルブックでその濫用が諫められている。

Lechuga Quijada (1996) で単に *pc* と書かれているのは el lenguaje "políticamente correcto" を意味することばである。上述の例の他、concubinato という本来の表現に対して pareja de hecho、本来の表現 ciego の代わりに invidente を使うのが *pc* である。この種の言い換えは元来英語圏(特にアメリカ)で始まり、今やスペイン語圏にまで拡がってきた。Lechuga Quijada (1996 : 18) は *pc* を言語学的な現象として取り上げるのが主たる目的であると述べている一方で、言語の目的がコミュニケーションであり、その内容が真実を表すならば、婉曲表現に満ちた *pc* はその伝わりにくさゆえに言語本来の機能を果たしておらず、適切な用法ではないと判断している。

この種の語の取り扱いは最近多くの国のマスコミが細心の注意を払っているデリケートな問題であり、対象となる語は社会的にマイノリティーな存在である人々を指すことが多いため、マスコミのスタイルブックでも適切な言い換え語が掲載されているが、独立した項目としてまとめるほどの大きな言語問題としては扱われていないように見える。これをマスコミの関心の薄さと見るべきか、あまり目立たせたくない問題として扱っていると見るのが正しいのか、スタイルブックでのこの種の問題の扱いを見ても判断をしにくいところである。また、日本語でもこのような表現の言い換えが問題になることがあるが、代替語使用が適切さか否か、対象となる語

すべてについて同じように判断することも容易なことではない。

localismo とは、Lechuga Quijada（1996：19-75）の説明によると、カスティーリャ語の一方言であるアンダルシア方言で見られる用法（No recuerdo más nada. など）[16] である。さらに、スペインの地方語の用法をそのままカスティーリャ語に翻訳した表現をも含む。つまり、二言語併用地域で観察される現象であり、上述したように、Lechuga Quijada（1996：75）が galleguismo の例としてあげたものは本来この localismo に分類されるべきであると筆者は考える。また、カタルーニャ語からの類推例としては Me he *oblidado* las cartas. や ¡Me he descuidado las llaves! 等が指摘されている[17]。

vulgarismo は文法規範から逸脱しているが、一般的に広く使われている用法である。規範から外れているので③よりは②に分類するほうが適切かもしれない。Es que *me se* caen los pantalones. のような文法的誤用や damas y caballeros という表現（→英語の "ladies and gentlemen" の翻訳語で、カスティーリャ語では "señoras y señores" であるべき、とのこと）[18] の使用など、様々な要素がこの vulgarismo に分類されている。Lechuga Quijano（1996）はこの vulgarismo の話の最後に都会の上流階級者の居住区域（zonas bien）に住む住民の間で使われる独特の言語（el lenguaje pijo）について簡単に言及している[19]。本稿でも残念ながらこの言語の詳細について触れる余地がないので、スペインにおいても日本の都会と同様、いわゆる「山の手と下町」的な言葉遣いの違いが存在することを述べるにとどめたい。

etimología popular の例として Lechuga Quijano（1996）が出しているのは上述の表の例 destornillarse だけであるが、もっともらしい説が一般人の間に流布するのはどんな言語にも起こりうる現象であろう。

muletilla については、使わないほうが望ましいというのが規範的な立場である。口語的表現で会話の潤滑油としての機能を果たすので、多用しないのであれば、筆者個人としてはむしろ好ましい印象を抱く用法である。口語的な用法は規範という尺度からは少し外れるものという判断が示されているのであろうか。

最後に挙げられた palabra-ataúd は Lechuga Quijano（1996：55-56）が用いている用語である。これは hacer, pasar のように様々なことばの代わりに用いることのできるオールマイティな語の使用を指す。例としては

telefonearの代わりにhacer llamadasと表現したり、cosa, sitio, tío, temaのような名詞も含まれる。様々な表現に使えるこのような語は便利であるが、望ましい言語表現というものが語彙の豊かさに裏打ちされているならば、一般的に語義が狭くて使用頻度は低いが特定の表現にふさわしい語彙を選択するほうがよいということである。

以上、Lechuga Quijano (1996) の分類例を参考にして、明らかな誤用というよりはむしろその使用が望ましくないものとして規範的な書物の中で言及される傾向のある用法についてそのあり方と本稿筆者の見解を述べた。

近年続々と出版されている、規範に関する出版物の内容を比較検討してみると、例えば望ましくない表現に対してbarbarismoなど別の呼称を用いたり、問題となる用法を異なる観点から論じている書物があったりして、その編集形式は画一的ではない。しかし、結局、この分野の書物でほぼ共通してその使用が望ましくないという評価を下されているのは、カスティーリャ語の外から新たに入ってくることばとカスティーリャ語を母国語とする人々の社会階層やことばの使用状況の違いによってスペイン国内で生じることばのバリエーションであることがわかる。

また、規範的な書物では、スタイルブックのような実用書、言語の専門家たちが執筆する言語エッセイ的な性格の書物いずれにおいても、非文法的ではないがその使用が望ましくないとされる用法に対して、著者は間違いとか不正確という判断を明快に示している場合が目立つように思える。規範を示す側の人間にはその著作の中で規範を示し読者にわかりやすい判断を下すことが期待されているのであろう。

4. カスティーリャ語の未来と規範

本稿では、カスティーリャ語の言語規範を示す側にいる人々が一般人向けに書物の形で規範を示す際にカスティーリャ語のどんな問題点を選び取っているかその傾向を概観してきた。文法上の規範については、明らかな誤用の指摘や混同しがちな複数項目の語彙の列挙を中心とした記述をおこない、文法以外の分野で示すべき規範については、誤用であると断定したり、使用が望ましくない表現の使用回避や他の語への言い換えを提唱したりしてきた。

近年のスペインは、出生率が下がる一方で、移民の数がどんどん増加している。また、二言語併用地域における言語正常化も進んでいる。このような現在進行中の変化が起こっている中で、スペイン全国の公用語であるカスティーリャ語はこれからも外部から入ってくる語を取り入れることになるだろう。また、そんな国で生きていく国民の価値観は多様化し、それが新しいことばを生むこともあれば、逆にすたれていくことばも出てくるのは当然の成り行きである。

インターネットや携帯電話の普及がスペインの社会にもたらした影響の大きさについてはもう改めて言うまでもないだろう。誰もが情報発信を気軽にできる時代になり、ネット普及以前であればまず出会うことがなかったかもしれない人々との遭遇が盛んになっているのはスペインだけの現象に限らない。そして、そんな時代の中で人々の言語に対する関心はこれまでになく高まっている。しかし、それは必ずしも人々が規範に忠実に従うようになることを意味しない。自由にものを考え表明することに支障がなくなった今の時代に、示された規範を吟味し、ある時にはその指針を自分の判断の参考にし、また別の時には規範とは無関係に自分の意思や嗜好にもとづいてことばを使いわけるようになったのである。最近話題になっているネットや携帯電話のSMSのユーザーによる省略文字使用等の流行は規範が示すものとはほど遠いところに位置づけられる現象であるが[20]、大勢の人々にその使用が支持されない限り、このような新語が将来のカスティーリャ語の姿を劇的に変えていくとも予想しがたく、ユーザー自身が必要性や相手に応じてことばの使い分けをしていると考えるほうが言語の実態にあっているように思える。今回は規範を示す側の立場の人々をめぐる考察を中心に据えたが、この考察の結果見えてきたものを踏まえて、カスティーリャ語を今後も使い続けていく人々の側の行動原理の追求を今後の研究課題としていきたい。

NOTA

(1) Gómez Torrego (1999) を参照。

(2) もちろん、前者は日常生活では後者にもなりうるが、後者は不特定多数の存在であるため、前者の後者的な立場はこの際それほど大きな問題とはならないと思われる。

(3) Frago Gracia (2002 : 61-62) を参照。単語の綴りや動詞の活用形などにおいて、どちらかと言えば、Nebrija は Valdés よりも革新的であったとされている。

(4) Quilis (1984 : 53-56) を参照。必要な文字を作り出す一方で、ラテン語起源ではあるが実際使用されていない不必要な文字の廃止を提唱した。

(5) Real Academia Española (1973, 1982 : 5) の ADVERTENCIA の一文。西川 (1988 : 205)によると、この文法書も Andrés Bello の時制論の影響を受けて、amaría と habría amado を直説法として規定するなど、それ以前のアカデミアの文法書から改訂された箇所がある。

(6) アカデミアの辞書 (1984年版、1992年版) に採用された語彙を比較し、アカデミアの新語採用傾向を分析している。特に外来語の採用に関する考察が興味深い。

(7) Real Academia Española (1999 : VII) に、スペイン王立言語アカデミア以外にこの書物の成立に関係した21の言語アカデミアの名前が創設順に列挙されている。その中にはフィリピンのスペイン語アカデミアや北米言語アカデミアも含まれている。

(8) EL PAÍS Digital 2001年7月4日付の記事 "El nuevo diccionario de la RAE triplicará las voces americanas" による。Web版の記事であるが現在は閲覧不可能。

(9) 規範的な書物ではカスティーリャ語の単語のアクセント記号の有無も問題になるが、Ediciones EL PAÍS (1996 : 121) は、EL PAÍS のタイトルの文字が登録商標として用いられる時は EL PAIS と表記することを明記している。しかし、それ以外の場合には近年の一般的な正書法の傾向に準じて、EL PAÍS と綴る。同書の中でもその規則は守られていて表紙の文字はアクセント記号なしの PAIS であるのに対して、本文中はすべて PAÍS と記されている。

(10) EL PAÍS (2001 : 7) を参照。

(11) ABC (2001) の Bibliografía によってその年以前にスペインで出版されたスタイルブックを知ることができるが、1993年以前に ABC がこの種の本を出版したことはないようで、ABC (1993 : 225-226) によると、同書の出版は EFE 通信社の *Manual de estilo* (注 : EFE (1998) の前身) の出版に触発されるところが大きかったようである。ただ、1973年出版の EL PAÍS 紙のスタイルブックではなく、この1976年の EFE 社の書物をスペインのジャーナリズム界初のスタイルブックとしているのは、単なる勘違いによるものかあるいは意図的な表現であるのかは不明である。

(12) ABC (2001 : xvi-xvii) を参照。

(13) 巻末 URL アドレスを参照。

(14) 言語の専門家のエッセイの中には、言語の規範に関する問題のみならず、多言語国家スペインについての興味深い話題が盛り込まれたものもある。本文中では言及しなかったが、言語アカデミア会長を務めた Fernando Lázaro Carreter の *El dardo en la palabra* (1997)、その続編 *El nuevo dardo en la palabra* (2003) の出版やマドリード自治大学教授 Juan Ramón Lodares の *El paraíso políglota* (2000)、*Gente de Cervantes* (2001) 等一読に値する言語エッセイは数多い。スペイン語とコンピュータ用語の問題については、José Antonio Millán の *Internet y el español* (2001) が詳

しい。

(15) Lechuga Quijada (1996 : 95-108) ではこの章は語彙集の体裁をとっているため castellanopatía と判断される語をアルファベット順に配置して、それぞれのタイプが書かれている。しかし、本稿では説明の都合上、タイプ別に編集し直してまとめてある。

(16) Lechuga Quijada (1996 : 74) を参照。

(17) 同書 (1996 : 72) を参照。共にカタルーニャ語からの直接借用表現である。

(18) 同書 (1996 : 85) を参照。

(19) 同書 (1996 : 87) を参照。

(20) Arenós (2002) に最近のバルセロナの一部の若者の間で流行している SMS 用の省略文字が取り上げられた。英語から始まったものであり、今やカスティーリャ語でもカタルーニャ語でも使われているという。カスティーリャ語の例としては、clga (→ colega)、ers 2 (→ ¿eres tú?) tas OK ? (→ ¿estás bien?) 等。仲間内でないとわかりにくい語彙が多い。

BIBLIOGRAFÍA

ABC (1993) : Prensa Española *Libro de estilo de ABC*, 9ª edición, Ariel, Barcelona.

—— (2001) : Vigara Tauste, A. M. y Consejo de Redacción de ABC *Libro de estilo de ABC*, Ariel, Barcelona.

Agencia EFE (1992) : *Vademécum de español urgente*, Fundación EFE, Madrid.

—— (1998) : *Manual de español urgente*, Cátedra, Madrid.

Arenós, Pau (2002) 'Curso de poda del idioma', El Periódico de Catalunya, 19 de enero de 2002.

Bosque, I. y Demonte, V. (dir.) (1999) *Gramática descriptiva de la lengua española*, 3 tomos, Editorial Espasa Calpe, S. A., Madrid.

El Mundo (1996) : De la Serna, V. (coor.) *Libro de estilo de EL MUNDO*, Unidad Editorial, S. A., Madrid.

EL PAÍS (1996) : *Libro de estilo EL PAÍS*, 13ª edición, Ediciones EL PAÍS, S. A., Madrid.

—— (2001) : *Libro de estilo EL PAÍS*, 17ª edición, Santillana Ediciones Generales, S. L., Madrid.

Frago Gracia, Juan A. (2002) *Textos y normas comentarios lingüísticos*, Gredos, Madrid.

Gómez Torrego, Leonardo (1993a) *Manual de español correcto I*, ARCO/LIBROS, S. L., Madrid.

—— (1993b) *Manual de español correcto II*, ARCO/LIBROS, S. L., Madrid.

—— (1995) *El léxico en el español actual : USO Y NORMA*, ARCO/LIBROS, S. L., Madrid.

—— (1999) 'La variación en las subordinadas sustantivas : dequeísmo y queísmo' en Bosque, I. y Demonte, V. (dir.) *Gramática descriptiva de la lengua española* tomo II-34, Gredos, Madrid, 2105-2148.

Grijelmo, Álex (1997) *El estilo del periodista*, Taurus, Madrid.

—— (1998) *Defensa apasionada del idioma español Llamamiento para evitar el deterioro de una lengua*, Grupo Santillana de Ediciones, S. A. Madrid.

—— (2000) *La seducción de las palabras*, Grupo Santillana de Ediciones, S. A., Madrid.

Lechuga Quijada, Sergio (1996) *Castellanopatías Enfermedades del castellano de fin de siglo (Con un Diccionario de lo que no hay que decir)*, Ediciones Universidad de Navarra, S. A., Pamplona.

Martínez de Sousa, José (2000) *Manual de estilo de la lengua española*, Ediciones Trea, S. L., Gijón.

西川　喬 (1988)『スペイン語時制研究史 (1492-1870)』神戸市外国語大学外国語学研究所、神戸。

Quilis, Antonio (1984) Estudio y edición de "Nebrija, Antonio (1492) *Gramática de la lengua castellana*", Editora Nacional, 2ª edición, Madrid.

Real Academia Española (1973, 1982) *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Octava reimpresión, Espasa-Calpe, S. A., Madrid.

—— (1999) *Ortografía de la lengua española*, Espasa Calpe, S. A., Madrid.

Romera Castillo, J. *et al*. (1996) *Manual de estilo. UNED*, UNED, Madrid.

Santos Guerra, Miguel Ángel *et al*. (1997) *Libro de estilo para universitarios*, 2ª. edición, Miguel Gómez Peña, S. L., Málaga.

参考 URL アドレス

http://culturitalia.uibk.ac.at/hispanoteca/Bibliographie/NORMA%20y%20ESTILO. htm

"Lengua y cultura hispanas para estudiantes de habla alemana" というサイトの Bibliographie の中の Norma y estilo のページ (Justo Fernández López 氏編纂)

El castellano actual y su norma

EZAWA Terumi

Se considera que la Gramática escrita por Nebrija fue la primera que estableció una norma gramatical del castellano. Pero, según Frago Gracia (2002), se tardó mucho tiempo en la uniformación de la lengua, ya que aún había variaciones individuales entre los intelectuales.

La Real Academia Española de la Lengua (RAE) ha seguido transmitiendo la norma de la lengua a través de sus Diccionarios y otras publicaciones. La sociedad de España ha cambiado drásticamente estos veintitanto últimos años y este cambio ha influido mucho en la situación lingüística del país. Han venido muchos extranjerismos procedentes de otras lenguas y han sido introducidos muchos neologismos en el mundo de los castellanohablantes. Gracias a la difusión de la red, la RAE, que había mantenido una postura tradicional, empezó a cambiar su estrategia para buscar la nueva norma del castellano para esta época.

Hoy en día la gente común también necesita saber la norma gramatical del castellano en una sociedad en que abundan estas nuevas palabras. Por su parte, los profesionales de la lengua —— periodistas o lingüistas —— quieren darle a conocer la situación del castellano actual y la norma, ya que piensan que el juicio de la RAE se ha quedado un poco atrás en la marcha del tiempo.

Así que la prensa o los lingüistas han publicado algunos libros de estilo o manuales. Asimismo algunos de ellos han escrito ensayos sobre el castellano de hoy.

Estos libros tratan los errores gramaticales, los extranjerismos y los neologismos que se han producido en el país. Muchos de los autores juzgan muy claramente lo correcto o lo incorrecto de los casos problemáticos, aunque hay algunos temas delicados cuya valoración es muy difícil ; p. ej., la denominación de las minorías.

Con dichos libros podemos saber cuál es la norma del castellano actual y la imagen de la lengua para estos autores especialistas.